

## 作業を通して希望を見出した終末期がんの事例

施設名：博愛記念病院

発表者：瀬河 亮介 (作業療法士)

共同演者：高田 幸治 (理学療法士)

### 【はじめに】

喉頭がんによる喉頭全摘出術を行い、発声困難となり対人交流への不安から引きこもり傾向となった事例を担当した。大切にしていた作業の実践を経て、楽しみや希望を見出した事例を以下に報告する。

### 【事例提示】

70歳代男性。喉頭がん術後、転移性肺がん。平成X年頃より喉頭がんを認め喉頭全摘出術施行。両肺に転移を認め緩和ケア目的にて当院へ入院した。主訴：息子に迷惑かけずに死にたい。Needs：人と話してみたい。がん告知済み。Karnofsky Performance Status:80%。FIM:98→102点。MMSE:30/30点

### 【作業療法評価】

生活史：元写真屋を営んでおり、日常の風景や人生の大切な場面を記録してお客様の笑顔を見ることが、仕事のやりがいであった。妻が介護を必要とする状態となり夫として最後まで傍に寄り添い見送った。ADOC：園芸(重要度3/5,満足度1/5,実行度1/5),俳句(3/5,4/5,3→4/5),写真(2→4/5,1→5/5,1→4/5)。OSA-2：発声困難により自分を表現できない、日課や役割がないと作業有能性の低下を認める。

### 【経過】

介入期間8週間書字のコミュニケーションに拒否があり。表情変化は乏しく自室内のみで過ごしていたが、作業療法として「写真」と「俳句」を提示した結果、被写体を探す目的で自室外へ行動を広げた。その後、病棟を散歩する姿や、集団リハビリに参加する様子が観察され、表情には笑顔が多く見られた。退院時に「また写真を撮りに来ます。渾身の一句を読みますね。」と前向きな発言があり、退院後に屋外で写真を撮る姿を見かけたが、病状の悪化もありX+7年にその生涯を終えた。

### 【考察】

Davisは「人の希望の本質はそれまでに何を大切に生きてきたかによって意味や重要性も異なる。」と述べ、仕事の生きがいや家族の一員としての役割を知ることが、希望となる大切な作業へ従事する機会となり自己肯定感の向上に繋がった。また希望を抱き続ける為に、作業の継続による成功体験の積み重ねは有効であると考えられる。